

私たちは、これまでにステパノのメッセージを三回に分けて見ましたが、それに対するユダヤ人たちの応答が今日の箇所に記載されています。54節「人々はこれを聞いて、はらわたが煮え返る思いで、ステパノに向かって歯ざしりした」。「はらわたが煮え返る思い」とは、あまり使わない表現だと思いますが、それが憤りで満ちた様子を伝えていることは明らかです。ステパノのメッセージを聞いたユダヤ人たちは、「はらわたが煮え返る思いで」、ステパノに向かって「歯ざしり」しました。

では、その後、彼らはどうしましたか？57-58節の前半「人々は大声で叫びながら、耳をおおい、いっせいにステパノに殺到した。58 そして彼を町の外に追い出して、石で打ち殺した」。以前の箇所で、使徒たちが同じような状況に置かれた時は、ガマリエルという人の仲介によって、彼らは釈放されました。でも今回は、誰の仲介もなく、ステパノは石で打ち殺されてしまうのです。しかも、ここから教会に対する激しい迫害が始まり、使徒たち以外の者たちは皆、諸地方に散らされてしまいます。

いかがでしょうか？ここで教会の指導者の一人が殺され、教会に対する激しい迫害が起こったことを、あなたはどのように理解しますか？そのようなことをあなたはどのように受け止めますか？この世的な見方をするなら、それは「災い」としか思えないでしょう。ステパノ自身も、「この罪を彼らに負わせないでください」と、ユダヤ人たちがしていることを「罪」といいました。また彼を葬った者たちは、彼の死を非常に悲しんだのです。信仰者たちは、家を荒らされ、諸地方に散らされ、難民となります。ユダヤ当局に捕らえられた人々もいました。

もし私たちの命が、この世だけに限られたものであるなら、ここで起こっていることは間違いなく「災い」といえるでしょう。でも私たち信仰者は、この世ではなく、次に来る御国を待ち望む者です。そんな私たちも、このことを「災い」としか受け止めることができないのでしょうか？それが災い、悪であるゆえに、「いつの時代にも、誰に対してもこんなことは起こってはいけません。だから何としても避けるべきだ」というべきですか？もしそうであるなら、私たちはこのことの中に何の希望も見出せないこととなります。

ところが、ステパノはどうだったのでしょうか？彼もこんなことは避けるべきと思っていましたか？彼は、ユダヤ人たちが頑なで、心と耳とに割礼を受けていない者、いつも聖霊に逆らっている者であることを知っていました。その上で、あのようなメッセージを語ったのです。当然、自分の身にどんな危険が及ぶかくらいは覚悟していたと思います。この時の彼の様子を見てみましょう。55-56節「しかし、聖霊に満たされていたステパノは、天を見つめ、神の栄光と、神の右に立っておられるイエスとを見て、56 こう言った。『見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見えます。』」。

聖霊に満たされていたステパノは、天が開けて、神の栄光と神様の右に立っておられる主イエスを見たといいます。死の間際に、主イエスを見て、息を引き取られる方がおられることを聞いたことがあります。この時のステパノも、主イエスを見ていたというのです。いかがでしょうか？あなたは、そのようにして主を見ることを、「自分の死が近づいていることの証拠だ」と言って、災いといえますか？栄光の主に見えること、それはすべての信仰者にとっての願いであり、私たちが待ち望んでいることではないでしょうか？その時、私たちは主から栄光のからだを与えられ、この主と永遠を共にすることになるのです。

そうであるなら、ステパノが石で打ち殺される中でも、栄光の神とその右に立っておられる主を見れたことは「幸い」であったということではありませんか？それだけではないのです。ステパノは、その主に向かって言いました。59-60節「こうして彼らがステパノに石を投げつけていると、ステパノは主を呼んで、こう言った。『主イエスよ。私の霊をお受けください。』60 そして、ひざまずいて、大声でこう叫んだ。『主よ。この罪を彼らに負わせないでください。』こう言って、眠りについた」。

このステパノの言葉は、十字架の上の主イエスを思い出させますが、彼は主を呼んで、自分の霊を主にゆだねたのです。しかも、自分を石で打つ者たちのために、呪いではなく、赦しを請いました。このようなステパノのうちに、迫害者たちに対する憎悪の心は見られますか？ここでは「死」ではなく、「眠り」と表現されています。

すが、それは主に永遠のいのちの望みを置く私たちにとって、肉体の死が、眠りにつくことであり、その眠りから必ず目覚めることが前提とされているからです。

ここでの出来事、それ自体は「災い」です。それはユダヤ人たちが行った「悪」です。でも、そのただ中で主に全く信頼し、自分の霊をゆだねたステパノ、また迫害者たちのために、彼らの罪が赦されることを願ったステパノは、本当に「災い」を受けたのですか？信仰によって彼が殉教の死を遂げたことは、可哀想なことであって、私たちはそんな生き方を避けるべきなのではないでしょうか？私にはそうは思えない。むしろ、自分がこの世を去る時には、彼のようにでありたい。つまり、主を見つつ、主の許に迎えていただきたいと願わされるのです。

どうぞこの時の主イエスの様子に目を留めて下さい。他の箇所では、ほとんどの場合、主は神の右に座しておられます。でも、この時は、立っておられたのです。考え過ぎかも知れませんが、ステパノは確かに「人の子が神の右に立っておられるのが見えます」と言いました。主イエスは、なぜ立っておられたのでしょうか？それはやがての日、直接、主に尋ねるしかないのですが、あなたはどのように思われますか？

主イエスは、ご自分への信仰（信頼）のゆえに、死をも恐れず、大胆に証をしているステパノを座って見ることができなかつたのではないのでしょうか？それは彼のことを心配するというよりも、むしろ、彼をご自分の許に招き寄せておられたのかも知れません。ステパノは、その主の懐に迎えられようにして、「私の霊をお受け下さい」と言い、主のもとに行ったのではないのでしょうか？これは推測の域ですので、決して「そうだ」と言い切ることはできません。でも、そのように主に迎えていただけるなら、何と幸いですでしょうか？

では、ステパノの殉教の死を機に、教会に対する激しい迫害が起こり、人々がユダヤとサマリヤの諸地方に散らされたことはどうですか？そのことは、神様の救いのご計画の外で行われたこと、つまり、それは神様の救いのご計画を妨げるものだったのでしょくか？この「ユダヤとサマリヤ」ということばを聞いて、ピンときませんか？使徒 1:8 で主が語っておられたことです。「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」

ここで起こった激しい迫害は、「聖霊を受けた者たちが、地の果てにまでわたしを証する者となる」という主のおことばを実現へと至らせるのです。というのも、これまでは、エルサレムにおいてだけ福音が語られ、そこで弟子の数が増えていきました。でも、この迫害を通して、今度はユダヤとサマリヤの諸地方に散らされた弟子たちが、そこで福音を語るようになるのです。それは彼ら自身が願ったことや計画したことではなかつたでしょう。なぜなら、そこでの出来事は悪ですから、誰も自分の身に悪が及ぶことは願いません。でも主は、すべてをご存知で、ユダヤ人たちの計った悪さえも用いて、人々の救いのためにそれを用いられたのです。

では、どうですか？このことから何ということが出来ますか？神様の救いとそのご計画、それは人の願いや計画、想像を遙かに超えてすばらしいものだということです。私たちの目には「悪」や「災い」としか思えないことは多々あります。でも主は、それらもみな御手のうちに治めておられるのです。そして、すべてのことを働かせることで、ご自身にとって、また神の子ども達にとっても益となされるのです。

このところには、回心前のパウロの姿があります。この時、パウロ自身がステパノを石で打ち殺したわけではなく、彼はそのことに賛成し、皆の上着の見張りをしていたのです。でも、この後に続く教会に対する激しい迫害を行ったのは彼でした。そんな彼ですが、皆さんも知っておられるように、彼は、国外に逃げたクリスチャンたちを捕らえるために、ダマスコに行く途中で、栄光の主にお会いし、回心へ導かれるのです。それは実に主のあわれみによりました。パウロにとって、ステパノの死は、無意味なものだったのでしょくか？

他の使徒たちとは違い、パウロは主と共に歩んだ人ではありません。おそらく彼は、主の十字架の出来事を直接、目撃していなかつたことでしょう。そんな彼にとって、ステパノの死は、その時は何の意味もなかつたかもしれない。でも、回心後には大きな意味をもつたと思うのです。聖霊に満ちたステパノのいのちを捨てての証は、同じ信仰に立ったパウロに、主イエスと天の御国に対する確信を与えたに違いありません。

この世には悪が存在します。それは私たち人間の外側だけでなく、内側にも存在しているのです。それゆえに、ここで起こったようなことは、今の時代にも起こります。私たちは、その悪に対して、ステパノが「彼らの罪」と正しく理解したように、罪は罪として、それが決して主に喜ばれるものではないことを理解する必要があります。もし自分のうちに罪（自己中心性）を見るならば、いつでも悔い改めるべきです。

でも、それをただ「悪」として、ただ「災い」として受け止めて終わってはいけません。そのような中でも主の救いのご計画、その恵みの御手があることを信じて、みこころを行う者、つまり、みことばを語り、善を行うことが大切です。たとえ、その意味が理解できなくても、主のみことばと聖霊の助けをいただいて、最後まで主に信頼する必要があります。

御子のうちにあつて私たちを選び、愛をもって召し出し、救って下さった父なる神様は、罪人たちが計った十字架の悪さをも、その罪人たちを赦すための救いの道具、道とされました。そんなことは誰も考えつかなかったことでしょう。でも神様は、それが起こる遙か前にご存知で、御子の十字架の死を通して、信じる者を救うと定められました。もちろん、主イエスもそれをご存知の上で、神のあり方を捨て、この世に来られ、自ら進んで十字架を負い、その苦しみを耐え忍んで下さったのです。その苦しみの先に、私たちが罪赦され、永遠のいのちを与えられて、神と共に生きる者となることを喜びとして見て下さったからです。

今、苦しみのただ中におられる方がいますか？「災い」としか思えない状況の中で意味を見出せず、希望のもない方はいますか？将来や死に対して不安や恐れをもっておられる方はいますか？どうか主イエスを求めて下さい。自分の願いを告げる以上に、主がどういう方であるかを知れるように、主ご自身を呼び求めて下さい。主は、私たちのために十字架にかかって死んで下さいましたが、三日目によみがえられ、今も生きて神様の右の座におられる方です。そこであなたのためにとりなしをして下さっています。

命の長さや最期の迎え方に関わらず、私たちを天の御国に迎え入れて下さるのは、この神の救い主、主イエスただおひとりです。その信仰のゆえに、石で打ち殺されたステパノを、神の右に立って迎えられたように、主はご自分の愛に対して、愛をもって応える者を、必ずご自分のおられる所に迎え入れて下さいます。今日、あなたは主イエスとそのような愛と信頼の関係をもっておられますか？主イエスの方では、あなたとそのような関係を求めていて下さるのです。心を注ぎだし、主を求めようではありませんか。この世のいかなる時にあつても、私たちに平安を与え、内側から強めることで、御国の望みで満たして下さるのは、主イエスだけです。